

(同床異夢)

人を呪えば「穴」二つ
人を想えば「蔵」三つ

而して男女は？

常にその「穴・蔵（あなぐら）」の中にて「同床異夢」を追うものなり



話を聞いたからと言って、特に自分で料理を作ろうと思ったわけではないのですが、出てくるものが、どういう手を加えるとそのような姿になるのかに幾分興味があったのと、離婚を経験した五十代半ばの男が一人来て、そうそう偶然に、見知らぬ人がいい話し相手になることもそんなにはないので、自然といつも目の前にいるお店の板前さんとお話をするようになりました。

手さばきから、若いのにかなり研究熱心なのがわかったのですが、かといってそうした職人さんに有り勝ちな気難しさやお堅いところもなく話し方にも誠意が感じられるし、人当たりもいい。

趣味はというとロック。しかもギターを自作したりもする。そのせいか女のお客さんにも人気のあるちよつと面白い人でした。

ある夏の夜、同じカウンターの並びの一番左奥に、自分と同じか、それより少し歳上と思しき小柄な女の人が座り、なにやらこちらをじろじろ見ていました。

その日初めて見る人でした。

話し方や振る舞いが少し他のお客さんとは違うような感じがしました。ちよつとずれている感じがして「幾分浮いているかも」と思いましたが、どうやら僕と同じで、その人もこの若い板前さんがお気に入り入りの様子。盛んに話しかけています。と、同時にやはり時々、こちらをじろじろ。

ですが、その「関心」に反して、板前さんを頂点にした二等辺三角形の二辺は交信があったのですが、ぼくとその女の人を結ぶ底辺の交信はありませんでした。

その数日後、再び同じ配置になりました。

なにやら今度は、

「マイセンのカツサンドをたくさん買って来たからみんな食べて、お客さんにも」

と板前さんに差し出し、若い板前さんも

「毎回恐れ入ります」

と答えているので、幾分退屈をしていたこともあって、敢えて

「たいそうお金持ちですねえ」

と声をかけると、

「あなたもおひとついかがかしら？おいしいのよ、これ」

と言いながら

「そちらにいつでもいいかしら？」

と僕の返事を待たずに、にこにこしながら隣の席に移ってきました。そうして、

「あなたこの前、お見かけしたときに、お隣の方に、たばこ吸いますが大丈夫でしょうかとお訊きになっていましたでしょう？近頃珍しい御紳士な方でいらつしやることと思つて・・・」

元々が、子供の頃から余り好き嫌いをせずに、誰とでも仲良くする質（たち）なので、程なく、それから何度か日時を決めて、お店で会うようになりました。

そのたび毎に、日本橋高島屋のどこその売り場のお土産だと言って、板前さんにそれを差し出していました。よく見ると、受け取るときに、ほんの少しためらいのようなものがあるのが感じられました。

しかし、当のご本人は何も感じていないようでした。

とにかく日本橋高島屋が大好きなようで、日本橋の高島屋以外はデパートとして認めていないみたいでした。

訊くとその人は、高校までアメリカで暮らしていたそうです。そのせいかどうか分かりませんが、全く唐突に、かなり場違いなタイミングで英語が飛び出すのです。

ところが、時々使う、本人だけは「ここぞ」とばかりにねらったつもりの、その場違いなタイミングの英語の発音が何故かとてもへたくそなのです。

まず、長文は話しません。発音も巻き舌ではなくて、なんだか舌の中に直角三角形規定でも入っているような感じ。水を米語の発音では「ウアラ」というべきところ、なにやら「藁（わら）」に聞こえたり、気にしなくていいよ、の「ドンマイヌ（小文字）」が「吞舞（どんまい）」のように完全に漢字読み聞こえたりします。なんだかちよつと胡散臭い気がします。

確かにお金はありそうですが、何かちよつと変なのです。

甚だ傲慢かとは思いましたが、発音だけとれば、僕の方がまだましかもしれないと言う感想を抱いたりしました。それにしてもそのような感想を抱かせてしまうレベルとは？

相当の年月、彼の地で暮らしたはずなのに、ここまで発音が直角、カタカナ読みなのは向こうで何かそうなる事情があったのかもしれない。例えば、暮らしていたのは外国だけ

れども、居場所としては自分の部屋ばかりだったとか・・・引きこもっていたとか。今見ると華やかに見えるけれど、ひとはわからないものだし。



そのうちその人は、初めはとも淑女然としていたのですが、暫くすると横にびったり張り付いて、間においてあるお皿に乗った煮魚の身を箸でぐちゃぐちゃになるまでほぐしてから

「はい、お口、あーんして、たべさせてあげるからね」と言った後、

「おいちい？」

とまるで二十代の「彼女」のようになり、次は

「ホールのあの子、あなたを狙っているわよ。そんなこと、させないから。来たら噛みついてやる！」と夜叉にもなり、最後は淑女の「し」の字も、跡かたなく消え失せ、それがその人一流の親しみの表現なのか、それとも本気でそう言っているのか、わからないのですが

「おだまり！シヤラップ！頭（ず）が高い、静かにおし！」

とまで言うようになりました。

食べ方もあまりキレイではないし、こうまで乱暴な口の利かされ方をされると

「本当に言う通りの素性なの？」

と疑いの気持ちが生まれてきました。

ところがあるときには、そうした「猫つかぶりの淑女」が口にするとは思えないほど、殊勝な態度で、しかも全く前後の話とは脈絡なく唐突に

「わたし男の人とああなるの、キライなの。ああいうふしだらなの、イヤなの！分かる？ ユーノウ？」

と酒の席ではあったにせよ、返答に困るような内容の質問を仕掛けてきたりもしました。そうしてその後「うにやむにや」いいながらカウンターに突っ伏してしまうのです。と、思いきや、またぞろそこから、やおら頭（こうべ）をもたげて、

「わたし、頭のいい人好き。それに、どこに住んでいるかなんて訊かないところも」

といいつつ、こちらから質問したわけでもないのに、自分は実業家の一人娘で、家にはお手伝いさんが居たこと。

家族と帰朝後、ミッション系女子大に進んだが、卒業後働いたことはないこと。

父親が「ゆりっぺ、ゆりっぺ」と猫かわいがりしてなかなか手放してくれなかったの
で、結婚は37歳までしなかったこと。

結婚した相手は鉄道技師で、週に何回かは泊まりで帰って来ないこと。

料理はしないで、ほとんど出来上がったものをお取り寄せするのだが、主人は文句を言
わない。そういう約束で結婚したのだから、ということ。

お子さんは、自分みたいなのももう一人居ては相手をするのにこまるので、作らなかつ
たこと。

父上は既に他界していて、莫大な遺産を、そんなにあっても仕方ないけど、相続だけは
したこと。

ここで飲んだ後は、いつも六本木のバーに行つて、みんなにドンペリをおごっているこ
となどを酔った口から、きいている方もいささかうんざりするでしょうが、こちらも、こ
こにかいたのですら要約済みの抜粋版ではないほど、このことに関しては細大漏らすま
いともしているかのように、そのひとは、ひとりでどんどん喋ってきました。

そんな話を聞いていてふと思ったのですが、この人は、かなり幼い時から、母親がいな
かったんだらうなと思いました。

滞米時の暮らし向きは知るよしもありませんが、本邦においては、長いこと父一人、娘
一人。いつもお取り寄せかお手伝いさんの料理ばかり。料理を作ったこともなければ、作
ろうと思ったこともない。作ってくれともいわれなかったから。でも父娘、仲良く暮らし
ていた。

それともう一つは、なんだかとても焼きもちやきで、こころの振幅もかなりあるひと
だなとも思いました。焼きもちについていえば、「嫉妬」や「ジェラシー」ではなくて、
「焼きもち」。お目めメラメラではなくて、ほっぺを「ぷーっ」と膨らますような。

例えば、その人がいないときに、僕一人で行つて、ほかの女のお客さん、それはもう8
歳のおばあさんを囲んでの二、三人の女性だったのですが、僕がそのグループと仲良く話
しているのを入りしなに目にして、僕と目が合った途端、「ぷい」とへそを曲げて、お店
から出て行つたりもしました。

お店の子に噛みついてやると言ったことや、ぷいと出て行ってしまったことを思い合わ
せると、この子、といつては失礼なのですが、なんとなくやはりこの子としか言いようが
ありませんので、この子は、まるで大好きな親戚のお兄ちゃんを盗られまいとする、兄妹
の居ない女の子が「くるな！ここからあたしの陣地。私のお兄ちゃんよ。家来は私だけな
の。わかった？さわんないで！あっち行け！」みたいな感じがしたのです。

他の人には女王様然と振る舞うのですが、何故か僕に対しては、まるで小四の女の子み
たいに振る舞っていました。

しかも、勘が強くて、焼きもちやきの子なので、確かにいると問題は起こすし、そのく
せまとわりついて、いささかうるさく思うこともなくはないのですが、居ないとなくな
く物足りなくもあり、妙な心境というか、気分でした。



そんなある秋の夜、かなりのレベルで酔っているのに、六本木のバーに行こうとするので、心配になって

「ゆりっぺ、もう帰った方がいいんじゃないかな」というと

「おだまりっ！誰に向かって口をきいているの？私に指図しないで！」と吠えた後

「ご主人様じゃないんだから、ゆりっぺ、なんてなれなれしく呼ばないで！「百合子様」と、お呼びっ！」

と更にご機嫌斜めになり、それでもよたよたしながら行こうとするので、やむなく電車で一緒について行きました。

「わたしの心配？そう？だったら、嬉しいわ。許してあげる。かわいいっ！」と、今度は甘えん坊さんの態度です。

ところが、お店に入る直前になって

「子供じゃないんだから、平気よ、早く帰ってよ。あたし、みんなに優しい人なんて大っ嫌い！」

と、僕の何がご機嫌を損じたのか分からないまま追い返されてしまいました。

しかし、それでもやはり心配だったので、バーのあるビルの外に出て待っていました。

もう午前の一時を回っています。

小一時間ほど待ちましたが、お店から出てくる様子がないので、ビルの階段を上がってお店の前まで行くと、その子が重そうなドアの前の床に突っ伏して眠っていました。

しかもお漏らしをして、その水たまりの中に

驚いたことに、大きい方も、一本ごろりとおわしまして。

おそらくストラックスパンツを脱いだしたのかも。

ちよっと困りました。

いや、かなり困りました。

いやいや、おおいに困りました。

見て見ぬふりをしようと思いました。

ひよっとして、本当は眠ってはいらないで、薄目を開けているのだとしたらと思うと、出来るだけ静かに、気づかれないように後ずさりをして階段を忍び足で降りました。

ドンペリを毎回頼む上客に、お店はこんな扱いをするだろうか？ということをお願い合わせると、何か見てはいけないものを見てしまった、恐怖とも罪悪感ともつかない気持ちに襲われました。

しかし、放っておく訳にはいきません。

仕方がないので、タクシーを呼んで、無理矢理抱え上げて、くずおれるように二人でバックシートに転がり込みました。

タクシーの後部座席で、その子は本当に眠っているのか？本当は起きているのか？よく分かりませんでした。

とにかく何も気づかなかった、見なかったことを印象づけないと、と思い、なにやら独り言のように、いろいろおとぼけの絵空事を言ったのですが、それが役に立ったのか立たなかったのか分からないまま、2万円を払ってタクシーから降り、運転手さんにお客さんを起こしてから、言うところまで届けてあげてくださいと頼んで、地元の駅のタクシー乗り場から小一時間かけて歩いて自宅に戻りました。

多分もう、連絡してこないだろうなと思いました。



ところが初冬のある夜、また、その子はお店にやってきました。そうして、ここは飽きたからほかのお店に行こうといいだし、別のお店に移りました。

そこは居酒屋さんなのですが、半個室のボックス席になっていて、席に着くなり

「わたし、このオーナー社長と懇意にしているの。ちゃんとサービスするのよ！」

とお店の人を一喝。あまりの唐突さと、場違いな権威の発揚を、こりやちよつとまづいと思っただ僕は

「自分がもしそんなこと言われたら、どんな気持ちになる？却って逆効果じゃない？やめた方がいいと思うよ」と言うと、

「それもそうよねえ。アツタマいい！好きよ」

と言って、唇を押しつけてきました。

ぼくはお店の人が見ているからと、遠慮をしたのですが、その子はなかなか離れてくれませんでした。

ふと見ると、靴を脱いで上がった板張りのボックス、そのテーブル下のやや厚手のウール地の靴下に穴がいているのが目に入りました。

お手持ちの奥様の靴下に穴ぼこ？

そういえば、お手持ちの奥様の割には、スカートをはいている姿も、和服の姿も見たことがないなと思いました。いつもストラックスかジーンズです。

その後、暫く飲んでから、僕は外に出て、少しふらつく身体を支えてあげながら、駅まで連れだって歩いて行きました。

そうして別れ際、拒むように遠慮したり、靴下の穴ぼこに気づいちゃったりして、ちょっと可哀想だったかなと思ひ、酔っていたせいもあって、僕は駅、改札前の人通りの多い中で、殆ど鯖折りをするみたいに、その子を、ぎゅっと抱きしめました。

その子の身体が後ろに、ぐつとのけぞりました。ぼくは力任せに鯖折りを続けながら

「まいったか？まいったか？」

と、「何がまいったか？」なのか自分でもよくわからないままこころの中でつぶやき、自分でもわからないそれが、逆にその子にはわかったのか？その子は、今までになく腕の中で、消え入るくらい静かにしゅん、となってしまうました。



その後一度会い、その前にあったとき「しゅん」となっていたので、今回はその「しゅん」からスタートかと思いきや、それを「なかったこと」に掻き消すかのような女王様然とした態度に出てきたので、本当は九州男児の上に勝気な自分は

「俺は、あんたの奴隷ではない。帰る」

と言ってその子を残したまま席を立ててあとも振り返らず、さっさと表に出てしまいました。

それから今一度、偶然通りで会ったとき、その子は

「この前、すぐに後を追っかけたのよ。ごめんなさいって言おうとおもって。駅のほうまで行ったり、反対方向のショッピングpromナードのほうまで行ったり。でも、見つからなかったわ」

その後、その子と暫く会うことはありませんでした。夏に知り合い、秋を深めて、大晦日が過ぎ、年明け暫くして、聞いていた携帯の電話番号に電話を入れました。

以前もお誘いの電話をしても出ないことが何回かあったので

「これじゃあ、電話番号を教えて貰った意味がないと思うけど」と言う

「ご主人様がいらっしゃるから、そのくらい分かるでしょ？」

と言われたことがあります。

それで、以降、電話は控えていたのですが、なんかやたらに恋しくなって、「禁を破って」電話をしてみました。

「今日くらいは、ちゃんと出てくれよな」と思っかけてたところ、数回のコール音の後、誰かが電話に出ました。

「はい、百合子の夫ですが」

慌てました。

ご主人が、その子の電話を取り上げてしまった？見つかったやつなの？

僕は当時、離別した後のひとりもので、問題はなかったのですが、相手にとっては「不倫」と言われても仕方がない状況です。まずい！

そうとつさに思っ「ちよつとした知り合いで、たいした用事ではないんです。はい！」と言おうとしたとき、

「生前百合子がお世話になられた方ですか？ありがとうございます。百合子は昨年のクリスマスイブの前日、23日の深夜に亡くなりました。お風呂の浴槽で溺れ死んだんです。さみしかったです。本当に可哀想なことをしました。私も留守がちで。それで毎晩飲み歩いて、とうとうその日も、泥酔して帰ってきた後、お風呂に入って、蛇口を開きっぱなしにして眠り込んで溺れてしまったようです。朝仕事から帰ってきて、返事がないので、家中あちこち探し回って、お風呂場で見つけました。何が起きたのか分かりませんでした。茫然自失でした。

警察が不審死として、調べにも来ませんでした。慌ただしい年の瀬とお正月でしたが、やっと少し落ち着きました。どちら様か存じませんが、出来れば百合子の冥福をいのつてやってくださいまし」

また同じようなことが起こってしまった。

そう思いました。

若いころから、生きていくか、既に亡くなっているかは別として、そうした女性をあえて選んだわけではないのですが、気が付くと、父親の存在が大きすぎる、俗な言葉でいえば「ファザコン」の女の人に愛されてきました。

そうして、その女性たちは、暫く自分と付き合ったのち、自分の元からいつしか去り、その後、風の噂によると、本人が亡くなったり、沿わぬ結婚をしたりして、みんな不幸な結末を迎える羽目になっておりました。

昔ある女性にこういわれたことがあります。

「あなたの頭の中は、何か他のことでもいいなのよ。他の女（ひと）じゃなくて、ほかの何か。あなたは、ほかの何かをいつも見ている、ここにいるけど、ここにいない。同じものを見ている、全く違ったものが目に映っている。いけれど、私はいつも一人のような気がする。この先、ずっとどこまで行っても、あなたの中に、私が入る余地はないような気がする・・・いつもわたしは、置いてきぼり」

長年忘れていたその言葉を思い出した瞬間

「あたしだけ見ているほしいのに。猫っ可愛がりしてほしかったのに。主人もあなたも、私は二の次の置いてきぼり。お父さんみたいにしてはくれなかった。なんで、お父さん、死んじゃったの？私一人をおいて。もう、いやっ！わたし、これからお父さんのところへ行く！」

そんな、ゆりつぺの、絞り出すような声が「はっきり」聞こえました。

(完)